

学生を大学教育に導くガイダンス —ガイダンス教育研究会の試み—¹

中村博幸²
京都文教大学

Guide Students in Their College Studies with GUIDANCE: A Trial by the Group of Guidance Education

Hiroyuki NAKAMURA
Kyoto Bunkyo University

筆者らは初年次教育という考え方が日本で明確にされる以前から、学生を大学及び大学教育に適応できるように教育する実践を続けてきた。その考え方を「ガイダンス教育」と名づけ、研究組織をつくり教育実践や実践研究を1990年代から行なっている。会の活動は、実践報告、模擬教授会、公開授業、模擬授業など、現在ではFDに多く用いられている手法を使っている。また内容も、担任・アドバイザーのあり方、基礎演習の内容と方法、カリキュラムの検討など広範囲にわたっている。そして大学教育の各種知見を深める為に、高等教育に関する各種答申などの勉強会や、講師を招いての研究会も行なってきた。そこで15年を節目に、ガイダンス教育の考え方と初年次教育や学士課程教育全般との接点を考えてみた。ガイダンス教育研究会の活動を時系列にみた時、その活動の拡大や関心の持たれ方は、まさに大学教育、初年次教育、基礎演習などへの関心の拡大と期をともしする。本論では、学生を教育するという考え方の概略を述べた上で、ガイダンスという考え方を述べる。その上で、前述の様にガイダンス教育研究会の活動とコンセプトの変化を時系列で述べていく。そして最後に、ガイダンス教育を行なう上での現在の課題についても、接続教育・転換教育の課題も交えて説明する。

〔キーワード：ガイダンス教育、模擬教授会、模擬授業、基礎演習、大学教育〕

1. はじめに

ガイダンス教育研究会（以下、GE研と略す）という、大学教育、特に大学基礎教育に関心を持つ者の集まりがある。³ GE研は「学生（身分・所属上）を『学生』（学習者・実質上）として育てる」というキャッチフレーズでスタートし、教育実践と実践研究を中心に現在まで研究会活動を行なっている。GE研がスタートした1993年は、初年次教育ということばも知られておらず、接続教育、転換教育という概念も定かでなかった。この15年間の大学教育を取り巻く環境の変化、また研究実績の積み上げは目を見張るものがある。その間に、GE研の「ガイダンス」のコンセプトも変化をしてきた。そこで、「ガイダンス」の考え方を振り返りながら、これからの大学教育、初年次教育との接点をさぐりたい。その上で「ガイダンス教育研究」のフレームが初年次教育の研究と実践に寄与すればと考える。なお、GE研の活動の具体については必要に応じて引用するにとどめる。

¹ 謝辞：ガイダンス教育の概念構築は、大阪電気通信大学名誉教授石桁正士氏、武蔵野大学教授矢内秋生氏、ジャーナリスト山岸駿介氏らの示唆による事が大きい。また研究会活動は会員メンバーの他、進研アド及び河合塾の援助による事も大きい。ここに感謝いたす次第である。

² 京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科 mediaken@po.kbu.ac.jp

2. 学生を教育する

(1) 大学教育の構造

大学教育の構造を表1の様を考えてみた。Iは基本概念である。つまり表1のVI→Iにしたがい、概念・時系列・場面などが、普遍的、共通的にとらえられる。以下に個々の要素を具体的に説明する。VIからIに向うにしたがって根本的な問題であり、議論の不一致もありうる。しかしその内容は、例えばVIの不一致は具体的方法、関係者の利害、実施の手立てなどによることが多く、Iの不一致は根本的な事であろう。すなわちIは調整が困難であるか、またよほどでないとは変化しない事であろう。

(2) 大学教育の変化（この15年を中心に）

ところで、GE研の初期の頃と現在では、ガイダンスの対象となる大学教育に大きな変化がみられる。以下に簡単にまとめる。

① 学部教育に対する認識の変化

大学教育が教育研究の俎上に上っている。教育関係学会で、初等・中等教育と並んで高等教育のセッションができています。また、中央教育審議会平成17年答申で、「多様で質の高い学士課程教育を実現する」と謳われ、さらに大学分科会制度・教育部会から「学士課程教育の構築に向けて」（平成20年3月）の報告が出されるなど、「学士課程教育」という言葉が日常的に使われるようになった。この平成20年3月の報告書では、学士課程教育の構築が喫緊の課題とした上でその必要性を四つあげている（表2）。そして社会との関係、高校との接続など、まわりとの関係を意識するとともに、学習効果や社会で通用する力など、教育成果について具体的に提言している。その教育成果については、表3の指針をあげている。学生を教育するという視点からの学部教育の変化は今後ますます大きくなると考えられる。

表1 大学教育の構造

| |
|--------------------|
| I. 教育するという概念 |
| II. 大学類型と教育目標 |
| III. 大学教育の具体像 |
| IV. 教育方法、教育視点 |
| V. 教育内容各論 |
| VI. 各大学のカリキュラム、各授業 |

表2 学士課程教育の課題

| |
|-----------------------------|
| ア. グローバル化の中での「21世紀型市民」の育成 |
| イ. 「学士」の水準の維持・向上と教育の中味の充実 |
| ウ. 「出口」の教育の質の保証 |
| エ. 大学間の「協同」の視点からの教育の質の維持・向上 |

表3 学士課程の教育効果に関する指針

| | |
|------------------|----------------------|
| 1. 知識・技能 | 3. 態度・志向性 |
| 2. 汎用的技能 | (1) 自己管理能力 |
| (1) コミュニケーションスキル | (2) チームワーク・リーダーシップ |
| (2) 数量的スキル | (3) 倫理観 |
| (3) 情報リテラシー | (4) 市民としての社会的責任 |
| (4) 論理的思考力 | (5) 生涯学習力 |
| (5) 問題解決力 | 4. 統合的な学習経験と創造的な思考力・ |

②教育の時期にかかわる変化

教養と専門、一般教育と専門教育といった漠然としたくくりから、学士課程教育の重心は初年次教育に移りつつある。その理由のひとつには全入・学力低下といった負の視点から、入学時教育がリメディアル教育として行われている事実がある。しかし、それよりも、前向きに鉄は熱いうちに鍛える、或いは大学における学習のスターティング教育として学習準備を行なうという視点の方が重要であろう。まさにガイダンス教育の構成要素である「大学生としての意識」・「大学生としての知識」・「スタディ・スキルズ」を早期に修得して、4年間の学習にのぞむという考え方があろう。

3. ガイダンスの概念

GE研の「ガイダンス」及び「ガイダンス教育」の概念は何なのか、まとめてみる。

(1) ガイダンスとは

ここで言うガイダンスとは、学生が大学で学ぶ為に必要な事柄(意識・知識・スキルなど)を、オリエンテーションし、それを、学生が修得する為の指導やサポートをさす。その内容構成として表4の事を考える(中村他, 1994)。そしていずれも一般的な概念・スキルを学ぶよりも、当該大学で学ぶ為に必要な事項の修得を優先する。

表4 ガイダンス教育の項目

| | |
|-----|------------------------------------|
| 意識 | 社会的立場の理解, 大学で学ぶ意欲, 個の確立 |
| 知識 | 大学の教育理念・設置目的, 教育のシステム, 大学コミュニティの存在 |
| スキル | 理解能力, 表現能力, 論理的能力 |

(2) 学生をとらえる視点

ガイダンス教育の対象となる学生を以下の様にイメージする。

①大学教育に関するプロトコルギャップ

教育を行なう大学及び大学教員と、教育される(学習する)学生とのプロトコルギャップ(Protocol Gap)が生じているという前提で、そのギャップを埋める為のガイダンスを必要とする(石桁, 1995)。

大学および大学教員は、ともすれば正統(伝統的)大学像や従来からの大学教育からイメージされる学生像(それは彼自身が学んだ時代の学生像に近い)に照らして、今の学生とのプロトコルギャップを感じている。それは例えば、学習スキルの欠如であったり、学習意欲・学習マナーの低下であったりする。

一方学生が感じるプロトコルギャップは、授業を理解できるよう指導してくれないといった中等教育的発想や、大学広報のプロパガンダと実際のキャンパスライフとのギャップなどがある。さらに、社会・企業等が求める大学像と大学教員が考える大学像とのギャップが加わり、認識の混乱が生じている。当初はこれらのプロトコルギャップを調整する為のガイダンス教育からスタートしたが、現在はそのいずれとも違った、大学教育といった視点で、接続・転換・導入教育を行なおうとしている。

②スタディ・スキルの不足

討論の技術, 論理性, オリジナリティといったリサーチスキルの基礎学力を初年次教育として、

学生が学習する必要がある。一方では、ノートテイク、日本語文章表現といったラーニングスキルをリメディアル (remedial) 的に教育する事の必要性もまた感じられる。

(3) ガイダンス教育の場面

ガイダンス教育は、大学在学期間を通じて行なわれなければならないが (中村, 2001), 具体的には図1の様にウェイトの違いがある。さらにガイダンス教育の場面としては次の三つが考えられる。

①オリエンテーションにおけるガイダンス教育

大学入学期のオリエンテーションはかなりウェイトが高いが、内容は履修方法、各種手続きの方法といった従来のオリエンテーションでなく、大学教育の理解といった転換教育的視点や、カリキュラムの流れをイメージさせるといった事が中心となる (中村他, 1999)。

さらに、各学年進級時のオリエンテーションでは、カリキュラム全体における現在位置の確認も必要となる。

②カリキュラムを中心としたガイダンス教育

大学入学期には初年次演習を中心としてスタディスキルを学ぶと同時に、情報コミュニケーションや外国語コミュニケーションなどのコミュニケーションスキルの学習も必要である (中村, 2006)。また、大学教育理解の科目として、ゼミ学習の方法、クリティカルシンキング、オリジナリティの重要性といった転換教育の視点の講義も必要である。

③担任・アドバイザー制におけるガイダンス教育

担任・アドバイザーには二つのベクトルがある。ひとつは大学・大学教員側から担当する学生に、ある意図を持った指導を行うことであり、例えば履修指導、就職指導などがこれにあたり、設定された目標を全学生にクリアさせる事を目的とする。もうひとつは学生から教員に相談を行なうことであり、学生の内発的必要性から教員と接触することである (図2)。

大学入学期は学生が居場所をつくるまでの不安定な時期であり、指導のベクトルは学生に居場所ができてから行なう方が効果的である。むしろ、不安定な学生が相談しやすい雰囲気と担当教員の選択方法が重要である。したがって担任・アドバイザーの実施方法も極力、個々の教員の持ち味を生かし、学生にとって相性の良い担任・アドバイザーを選ばせる工夫が重要である。それに対して上級学年では、担任・アドバイザーは図2における指導の要素が強くなり、ゼミ担当教員と連動する事が学生の状況把握にも好都合であろう。そして相談については、二次的要素として、必要な場合には学生の選択による副担任制度も考えると良いのではないだろうか。

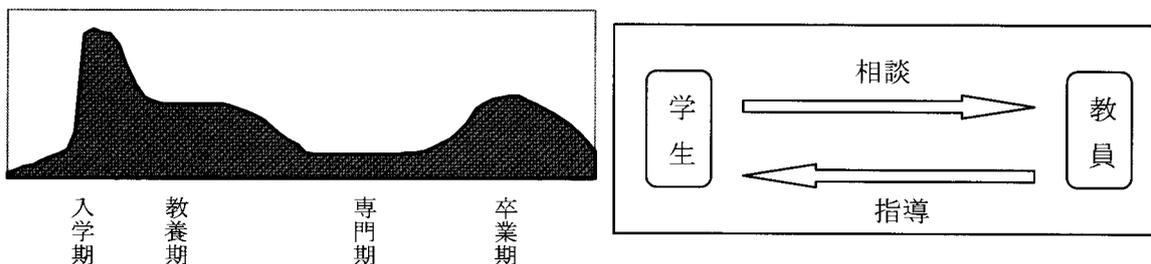


図2 担任・アドバイザーのベクトル

図1 ガイダンス教育の時期とウェイト (中村他, 1994)

4. 大学教員へのガイダンス教育

GE 研は学生へのガイダンス教育研究会としてスタートしたが、同時に大学教員へのガイダンス教育ともなった。すなわち、学生の教育をどうするのか、学生の資質向上のためにはどうすればよいのかを考える事が、実はその教員個々の資質向上につながったのである。むしろ FD として直接的に教員の教育力や授業技術の向上の研修を行なうより、学生に教育する内容としてワークショップおいた目的を設定する方が、効果があがるかもしれない。

(1) 教員の意識改革

大学教員の教育への意識（学士課程教育の構築についての意識も同様）は、表 5 の様に散らばると考えられる。そこで、全教員を一気に「是非、必要」にするのではなく、少しずつステップアップする、或いは上段階の人のみをよりステップアップするなどが効果的であろう。GE 研はその様に考えて実践してきたが、学会のワークショップなどもこの視点で充実していくのが重要ではないだろうか。

(2) 教員に対する教育への理解とスキルアップの手順

- ①「〇〇教育」の存在の理解
- ②実践例の紹介
- ③概念や理論のアピール
- ④ワークショップの開催

伝統型の研修ではなく、教員が自学自習、相互学習することが重要である。

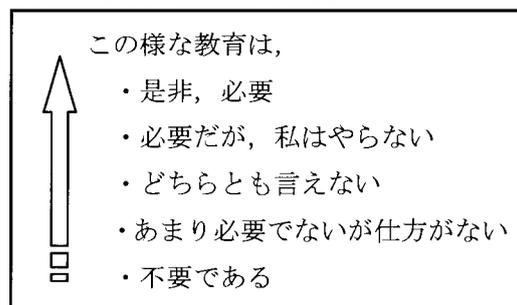
5. 教育実践及び実践研究の事例

GE 研はガイダンス教育という考え方で、学生を教育するという視点で教育実践及びそれに関する実践研究を行なってきた。以下にそのステップを報告する。各ステップが必ずしも時系列どおりでなく入れ子構造になっているが、ステップ毎に分類して説明する。GE 研の活動の流れを通じて、ガイダンス教育を含めた大学教育は、「何を」と同時に「いかに」も大切である事を理解していただければと考える。

(1) 考え方を共有する教員の連携

1993 年～1996 年（第 1 回～第 14 回）頃にかけては、ガイダンス教育という考え方をアピールし、仲間を多くする事を心がけた。メンバーの所属する学会で研究報告すると共に、近縁の研究発表者（同じセッションの発表者）に連携を呼びかけた。発表した学会は、大学教育学会、日本教育社会学会、日本教育工学会、電子情報通信学会教育工学研究会、日本家政学会などである。メンバーを多くする事により、ガイダンス教育の概念の構築に向けて、考えの共有化をはかった。

表 5 教育改革への関心度



(2) 概念の構築

大学で学ぶ為のガイダンスを教育として系統的に行なうには、その概念及び理論化が重要である。1995年から1998年（第10回～第20回）頃にかけては概念構築と理論化に心がけた。その集約として冊子（石桁，1995）を発刊した。目次の概要を表6に記す。

表6 高等教育機関におけるガイダンス教育の展開（目次）

| I. 理論編 | II. 実践編 |
|--------------------------|------------------|
| 1. 高等教育機関におけるガイダンス教育 | 1. ガイダンス教育の先行的試行 |
| 2. ガイダンス教育のねらいとカリキュラムの設計 | 2. ガイダンス教育の研究的展開 |
| 3. ガイダンス教育の内容把握 | |

(3) 考え方の深化：模擬教授会

1999年～2004年（第23回～第36回）頃は、ガイダンス教育の概念の深化と、研究会メンバーが勤務する大学での実践に役立つ様に、テーマを決めて模擬教授会を行なった。テーマ例を表7に示す。模擬授業の対象は架空の大学ではあるが、その設定を具体的に行い、その設定の為の議論を通じて多様な大学の存在を認識した。

設定の為の要素を表8に示す。特に教員のタイプについては、研究会参加者に設定したロールプレイを行なって貰い、実際の教授会の雰囲気近づけた。

(4) 考え方を他者に問う

ガイダンス教育の考え方を、高等教育に関心を持つ研究者ばかりでなく、大学教員全般や社会に問う事を考えた。

①雑誌への連載

Between（進研アド発行）の協力を得て、18回（1999年6月号～2001年3月号）にわたって、「ドキュメントGE...大衆化時代の大学教育」のタイトルで連載を行なった。表9の内容のうち、1と6はガイダンス教育の枠組、2～5は事例とコメントである。

②10周年記念フォーラム

GE研の10周年をくぎりとして大学コンソーシアム京都と共催でフォーラムを開催した。フォーラムの準備の為にGE研及びガイダンス教育のまとめができた。2000年～2001年（第25回～第28回）。フォーラムの概要を表10に示す。

表7 模擬教授会のテーマ例

| |
|---------------------------|
| ・GE短大の将来構想（第25回） |
| ・GE短大のカリキュラム改革と教育体制（第25回） |
| ・「日本語表現」授業の導入（第32回） |
| ・GE大学における初年次教育（第35回） |
| ・特色GPへの申請について（第35回） |

表9 Between 連載の概略

| |
|-------------------------|
| 1. 研究会の概略（2回） |
| 2. オリエンテーション・基礎教育（3回） |
| 3. 基礎演習（4回） |
| 4. 学習支援・学習環境（4回） |
| 5. やわらかな大学のシステム（4回） |
| 6. これからのガイダンス教育に向けて（1回） |

表 8 模擬教授会の設定要素

| | |
|-----|--------------------------------------|
| 大 学 | 専門，規模，教員の意欲・意識，学生のタイプ・学力・意欲，地域との関係など |
| 教授会 | 議決機関か伝達機関か，教員の関心・参加度など |
| 教 員 | 熱意，教育型－研究型，中等教育型，社会人型など |

表 10 GE 研 10 周年記念フォーラムの概要

| | |
|------------------------------------|---------------|
| 日時：2001年3月20日 | 場所：キャンパスプラザ京都 |
| テーマ：大学教育のエアポケット [ガイダンス・FD・マネジメント…] | |
| シンポジウム：「大学基礎教育のめざすもの」 | |
| 講演：「なぜ，このままでは大学は生き残れないのか」 | |
| 分科会 第1分科会：「基礎教育の実践報告」 | |
| 第2分科会：ワークショップ「基礎演習とカリキュラム」 | |
| 第3分科会：授業参観「基礎演習の模擬ゼミ」 | |
| 参加者：大学関係者 160 名 | |

(5) 基礎演習の模擬授業

ゼミの運営については，現在では当たり前になっているグループワーク，学生のアクティブな学習のスタイルがまだ知られておらず，前述の模擬授業でも非常に興味関心をもたれた（参加者の所属校から相談を受け，試行を経ていくつかの大学で導入される事となった）。

そこで GE 研でも，基礎演習の模擬授業及び，すでに基礎演習を導入している大学での授業参観を行なった。2002年～2004年（第32回～第38回）

模擬授業の例としては，第32回研究会の「日本語表現法」ゼミ，「発言を言語化するプロセス」の授業がある。担当教員は研究会メンバーで，学生は複数大学からのボランティアで行い，授業終了後に授業分析を行なった。授業参観の例としては，第38回研究会での「グループワークによる授業とプレゼン」（於：多摩大学）などがある。

(6) GE 研メンバーのスキルアップ

研究会が大きくなり新旧のメンバーが混在すると，会に参加しても受け身の参加者が生じてくる。そこで，2006年（第42回）頃から少人数単位のワークショップ形式の研究会に主眼を移している。この事により，GE 研のメンバーがガイダンス教育の考えばかりでなく，広く大学教育の理論や各学会の動向（コンセプト），各大学での実践を自分のものとして理解し実践できる様にスキルアップをはかっている。またこのワークショップの運営や教育技法を学ぶことにより，新しい指導法を身につけるといふ FD の役目も兼ねている。

6. ガイダンス教育を取り巻く当面の課題

(1) 中等教育との接続教育

高校からの接続教育と転換教育，いわゆる接続と転換のバランスが重要である。すなわち，転換が過ぎると断絶が起こり，ドロップアウトがおきやすい。かといってあまりにも接続がスムーズにゆきすぎると学生が高校生感覚のままとなる。さらに個々の学生にとって，高校・大学と学習の場が変わるだけでも大きな課題ではないか。このような学びの場が変わることや学び方が変わる事に関する接続は十分に対応できているとはいいがたい。まさにこの点からも，「ガイダンス」が必要である。

(2) 専門教育との接続

大学入学期の接続教育が重要視されたのは、図3左の様な状況が危惧されたからである。しかし、現在は図3中央の形となり、逆に基礎教育から専門教育への接続が危惧されている。基礎教育から専門教育への接続は大学内の事であり、カリキュラムの一貫性も検討しやすいはずである。早急にこの点の接続がはかられるべきであろう。

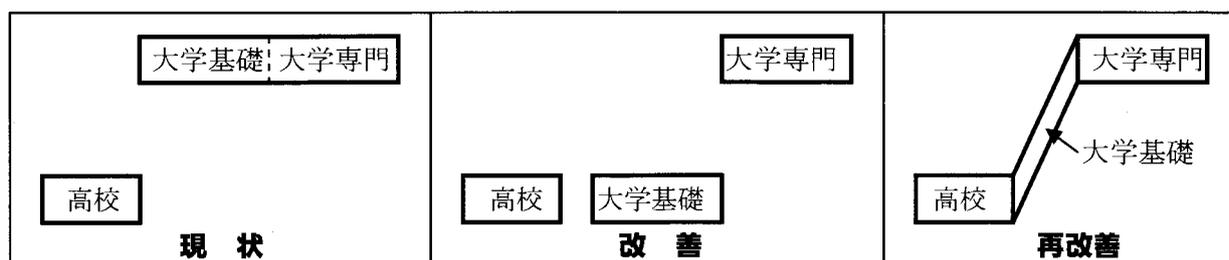


図3 中等学校・基礎教育・専門教育の接続

7. おわりに

「ガイダンス教育」という考え方を、ガイダンス教育研究会の活動と関連させながら述べてきた。それは一見、初年次教育という考え方とは別の様にも見える。しかし両者とも、学生が大学・大学教育に馴染み、スムーズに学習ができるためという目的は共通しているのではないだろうか。

有志の研究会を15年続けてきて感じた事は、教育に熱心な教員が多くいるという事であった。学会や研究会の名称が異なり、内容も少しずつ違っても、「学生を「学生」として育てる」という考えの教育実践や実践研究は、ますます盛んになる、或いはならざるを得ないのではないだろうか。

注

³ ガイダンス教育研究会 (GE研)

1. 設立：1993年8月
2. 会員数：101名 (大学・短期大学教職員、高校教員、教育産業関係者)
3. 研究会：年2～3回
4. 事務局：京都文教大学 中村研究室

参考文献

- 石桁正士 (編) (1995) 「高等教育機関におけるガイダンス教育の展開」『高等教育研究叢書 30』
広島大学教育研究センター
- 中村博幸 (2001) 「学習とガイダンスを中心とした大学カリキュラムの考え方」『日本教育社会学会第53回大会要旨集録』, 300-301
- 中村博幸 (2005) 「大学の類型と初年次教育の各要素の内容」『日本教育社会学会第57回大会要旨集録』, 221-222
- 中村博幸 (2006) 「第9章 京都文教大学」濱名 篤・川嶋太津夫 (編著)『初年次教育』丸善, pp120-133
- 中村博幸・秋尾保子 (1999) 「大学入学時のオリエンテーションについての一考察」『日本教育工学会第15回大会講演論文集』, 633-634
- 中村博幸 他 (1994) 「学生が高等教育に適應する為の準備教育」『日本教育社会学会第46回大会要旨集録』, 12-13
- 中村博幸 他 (1994) 「ガイダンス教育の展開 (3)」『日本教育工学会研究会 94-4』, 29-34